

竺沙雅章先生に聞く*

場所：京都大學人文科學研究所北白川分館應接室

日時：2003年6月6日(金)

参加者：

竺沙雅章 京都大學名譽教授

高田時雄 京都大學人文科學研究所教授（司會）

赤尾榮慶 京都國立博物館學藝課保存修理指導室長

落合俊典 國際佛教學大學院大學教授

辻 正博 滋賀醫科大學醫學部助教授

學生時代＝京大・大學院

高田時雄 きょうは、竺沙先生から敦煌學についての回顧というか、昔話をし
ていただきたいと思います。先生、お生まれは何年ですか。

竺沙雅章 1930年の3月です。

高田 大學は戦後ですね。

竺沙 昭和24年、新制大學の第1期です。ですから吉田分校で、宇治分校には
行かないで済んだクラスです。實は、私の大學入學は7月だったんです。授業が
始まったのは9月。だから、まるまる4年間はやってないんです。大學院のほう
もなかなか始まらなくて、5月からでした。だから僕は履歷書に「昭和28年5月」
としていたんですが、ここに勤めてから人事記録を見たらごまかしてあって、「4
月30日」になっていました（笑）。

高田 それはなぜですか？

竺沙 新制大學の準備が遅れたんでしょうね。

*ここに掲載するのは、十數年前に敦煌學研究會（京都）の主催で行った座談會の記録であり、
参加者の所屬なども當時のままである。今回、付印するに当たり、座談會参加者の一人でもある辻
正博氏（現京都大學大學院人間・環境學研究科教授）の校閲を煩わした。竺沙雅章先生は2015年
10月2日に逝去された。謹んでご冥福をお祈りしたい——高田記。

高田 そうすると、先生は新制大學院も最初の院生ということになりますね。

笠沙 そうそう。そのころの大學はややこしくて、僕は舊制高校を落ちたので、豫備校みたいなものですが、新制高校へ3年だけ編入して大學に入ったんです。我々と同じ者で、5年生のときに舊制高校に入學した者は明くる年、我々新制の者と一緒に新制大學を受けたんです。だから、せっかく三高に入ったのに、このときは落ちたやつもいた。そういうややこしい時代でした。

新制大學第1期の時期は文學部の先生方も非常に張り切っておられて、吉川幸次郎先生がみずから中國語を教えられたりしました。2回生になると、後期から専門の講義を聴講させ、演習、いわゆる講讀も文學部のほうで行うという状況でした。最初の講讀が那波利貞先生の『通志』の序でした。そこから那波先生との關係が始まったんですが、講義を受けだしたのは3回生のときからです。

那波先生は、講義も演習も大體は敦煌文書を使ってやられました。演習の場合、先生は謄寫版刷りのものを持ってこられて、本當は我々に讀ますべきだったんですが、だれも讀めないから、「それなら私が讀みます」というわけで、獨演會でした。4回生になったとき、演習は「中國古文書學」という表題になり、僕には非常に役に立ちました。まず甲骨から入り、金文、敦煌文書という、その邊まででしたが、漢簡はあまりやられなかった。今でも、甲骨の文書もちょっとぐらひは讀めます。もちろん、敦煌文書の講義も受けました。

高田 1年間でそれをやられたんですか。

笠沙 ええ。それと、當時は神戸大學におられたんですが、講師だった佐藤長先生のチベット史=吐蕃史の演習・講義があったんです。こちらへ來られたのは4回生のときだったと思いますが、演習で新舊『唐書』の吐蕃傳を讀んでいただいた。實は、あれが後の敦煌研究には非常にプラスになりました。ソンツェン・カンポとか、吐蕃の王様の名前もそのころ覚えしました。

それと、那波先生の講義や演習で印象に残ったのは、俗字をそのまま書いて「これはこうぞわす」とやられる。文書形式より、釋文のおもしろさをそのとき感じました。

大學院に入って、那波先生は8月で退官されました。當時は誕生日で定年になったわけですが、それまでの60歳が、あの先生のときに63歳まで延びた。その前期におやりになったのは、算術家のナントカという、敦煌の文書を使った…。それを樂友會館での退官講義でもされました。ただ、その當時、敦煌學に對する學生や研究者の反應は全然ありませんでした。注目されなかったですね。

高田 戦後間もないころですから、學生も含め、當時の知識人が社會思想の面でかなり左を向いていたことも大きく影響していたんでしょうね。

笠沙 それもあります。それと、宮崎（市定）先生の隨筆によると、學生のときに本のハンコをもらいに狩野直喜先生のところへ行ったら、「このごろ、敦煌、敦煌と言うとるが、ええかげんにしといたほうがええ」と言われたそうや。

高田 當時の學生というと…。

笠沙 狩野直禎らですが、舊制の最後の人です。小玉新次郎がもう1つ上です。同級生はいなくて、小野信爾、小野和子などは1年下です。あの當時は唯物史觀全盛期で、社會經濟史を大上段に振りかざすような歴史がはやっており、史料をこつこつやるようなことは餘りはやらない。那波先生の授業も、単位を取らなければいけないから出ますが、まじめに出てきよらへん。1回、僕ひとりだったことがあるんです。オフレコやけど、地理實習室で、晝からだからお日さんがぼかぼか入ってきて、もっばらノート取りでしたから途中で寝てしまってね。目がさめたら同じように先生がしゃべってはった（笑）。

高田 どこの教室ですか。

笠沙 陳列館のほうです。佐藤さんの吐蕃傳も少なかったですね。僕ひとりになったから、「先生、休講にしてください」と言うて、授業をやめてもらったことがあるぐらいです（笑）。

高田 佐藤先生の吐蕃傳は長くやっておられましたね。

笠沙 ずっと後までやられた。僕はあの講義で得意になることがあってね。先生が読み間違えたところを指摘したんです、ハッハッハ。

高田 笠沙先生が大學に入られたころの東洋史の先生方というのと、今名前の擧がった那波先生と佐藤先生のほかに？

笠沙 宮崎市定先生、田村實造先生、そして佐伯富先生。5人の先生がおられて、全盛の時期だったと思います。宮崎先生は、學部のころは太平天國の研究もありましたが、僕が先生の追悼録にも書いたように、大學院に入ったときに「胥吏の研究」というのが始まった。宋代から始まるんやと思ってたら、漢代から始まり、結局それは胥吏前史になったわけです。先生は毎時間、考えながら講義されて、それをまとめたのが『九品官人法の研究』です。ものすごい研究で、私の漢代から唐代までの知識はあの先生の講義で得られたと思います。

高田 先生が入學されたころは、羽田亨先生はもうお亡くなりになった…。

笠沙 いらっしゃいました。教養の先生だった¹。

高田 羽田先生の影響は強いような氣もするんですが…。

笠沙 非常に強いですよ。

高田 それでも學生が興味を示すことはなかったんですか。

¹この箇所、令息の羽田明先生と混同。

笠沙 中央アジア？

高田 胡語文獻といますか…。

笠沙 胡語文獻はまず關心を持たれなかったですね、言語の人は別として。しかし、1期生の森（鹿三）、水野（清一）、塚本（善隆）などはみな羽田先生の影響を受けています。貝塚（茂樹）さんはちょっと別かもしれんけどね。ただ、學問的に繼承した人は、例えば小野川（秀美）先生みたいに、突厥碑文をやってて…。「限界が見えたから」とおっしやっていたけれどもね。

高田 あれは委託研究じゃなかったんですか、戦時中の。

笠沙 そうです。あの人は、卒論は漢代やった。委託研究は人文研のやけど、あれをものすごく自慢してはった。

高田 東亞研究所か何かの委託研究でしたね。

笠沙 あのころはいろいろと委託研究があったらしいな。まともに成果を出した人と出してない人があって、索引事業も盛んやったけども、結局、最後まで出さなんだのが貝塚さんやった。

辻正博 實は原稿があったという話ですよ、『史記』のものも。

笠沙 やったのは小野川さんとか藤田さん。あれで給料をもらっていたんで、羽田亨先生の影響はわれわれの先輩の先生方が受けられたんで、我々は全然なかったですね。

高田 後で詳しく伺いますが、藤枝晃先生なんかは？

笠沙 直結していました。「『おまえら、研究會に出過ぎとる』と羽田先生にしかられた」と言うてはった。

そんなことで、僕は大學院のときも宮崎、佐伯先生の影響で宋代の福建佛教を修士論文に選びました。1年延ばし、3年かかって修論を書いたわけです。特に宮崎先生の影響が非常に大きかったです、ともかく、那波先生の授業にみんな出ないもんだから、田村先生が「ああいう先生はもう2度と現れんから、みんな出るように」と薦めてはった。

高田 東洋史の先生方でも、人気のある先生と、そうでない先生とがあったんですね。

笠沙 それはあった。那波先生は、文學部長もされなかったし、役職にも全然ついてない。ちょっと別格でした。着物ばかり着てて…。話はおもしろいんですよ。いろいろ脱線しはった。

落合俊典 どんなところで脱線されるんですか。

笠沙 「中國の美人は、六朝時代は細かったが、唐代になったら太うなった。彫刻はもちろんだが、書もそうや。顔眞卿になってきた」という話をされたり、ヨ-

ロッパへ行ったときの船旅の話もちよこちょこしてはった。カイロを入れて行ったら、爆薬を持ってるといってやられたとか（笑）、博識な先生でした。あの先生は、資料カードは全然なくて、黄色うなったノートを持ってきてはりました。

辻 それはパリ時代のものですか。

笠沙 それ以後の古いノートをそのまま。先生は移録したものをたくさん持って歸ってはったけども、見せてくれはれへん。それから寫したものを出してきてはった。ただ、ここの講堂で講演があったときに、何冊か持ってきて見せてくれたぐらいですわ。あれがどこへ行ったか。那波先生が亡くなって、延時（英至）というのが法學部にいて那波家の面倒をみてたけど、あのノートは行方不明です。

高田 それは残念ですね。

人文科學研究所時代と藤枝班

笠沙 で、大學院の2年を終わったとき、あのころは就職難の時代でしたが、ここで中國文獻班の助手の公募が出たんです。しかし、實際は圖書室の助手や。倉田淳之助先生はそのころ講師だったが、事務的な助手で講師ぐらいまでしかなれないけども……という状態だった。

高田 しかし、發令は國家公務員の文部教官助手でしょう？

笠沙 ではあっても、この中での話や。

高田 今でもそういうややこしいのがありますね。

笠沙 これはオフレコですが、阪大の脇田修が「おまえは受けへんのか」と言う。あれも同級生やけど、「いやあ、何とも思うてへんけど」と答えたんですが、川勝（義雄）さんが「受けへんか」と言うから「受けてもよろしいけど……」と。そのうちいろいろ聞いてたら、狩野直禎が受けると。そのころ、助手に里井（彦七郎）さんがおって「そりゃあんた、君らは無理やで」と（笑）。

高田 何人が受かったんですか。

笠沙 4人です。中原というのと、入谷仙介も。僕は受かるはずもないしと思ってたんやが、何とか取ってくれた。實は試験を受けた日、もうあかんと思って、飲み屋で飲んで12時ごろ歸ってきてん。そしたら「人文から何や持ってきはりましたで」というわけや。あした身體検査に來いというやつ。

高田 當時の試験は、筆記試験もあったんですか。

笠沙 筆記試験もちょっとしたものをやって、口頭試問が晝から。

高田 大體同じですね。

笠沙 みんなも思い出すやろう（笑）。そんなんでも中国文献学の助手ということで入ったんです。当時、川勝さんが助手であり、倉田先生が講師でおられたんです。なぜ助手を1人ふやしたかという、漢籍目録を作らなければいけないが、川勝さんだけではオーバーワークだと。また、文献類目もやらなければならん、圖書の整理もやらなければならん、というわけです。だから、ほんとに事務助手です。一應は研究助手だから助手會にも出ていたけれども、実際は、朝9時から夕方5時までは圖書の仕事、5時以後に一回下宿へ歸り、食事を済ましてからまた出てきて、晩は自分の仕事をした。

高田 席は上の事務室ですか。

笠沙 そうです、上です。ただ、小川先生は非常に理解があって、「勉強するのはよろしい」と、ご自身で『文選』を読んでくれたりしました。中国文献班のほうは『士禮居題跋』をずっと読み、小川先生も來られたし、尾崎（雄二郎）さんも有力な助手でした。

高田 小川先生は所員も兼ねておられたんですか。

笠沙 いや、僕らが出てからです。鈴木俊さんの敦煌研究班はドクターコースに入ったときから始まったんで、加えていただきました。『敦煌文献研究論文目録』1ページの下の方に「1952年東京大學山本達郎教授はその渡歐に際し、印度省圖書館に交渉される所あり」云々とあり、「同年10月同じく榎一雄教授（当時助教授）は、ロンドン大學の招請に應じて渡英したのを機として」大英博物館の敦煌文書の撮影を行った。そして、ポジのマイクロフィルムが將來された。そこで敦煌文献運営委員會が組織され、54年にそのポジフィルム全巻が東洋文庫に納められた。その焼付け寫眞が東洋文庫と人文科學研究所に置かれ、敦煌文献研究班が作られた——ここに書かれているとおりです。ですから、科研費で敦煌研究が始まったのは56年か7年……7年くらいやったと思います。僕は昭和31年にドクターコースに入り、33年に助手になったんですが、その前に敦煌研究班に入らしてもらってたんです。

それはどうしてかという、僕は那波先生の授業を受けており、しかも敦煌文書は寺院文書が中心になりますので關心は持っていたし、また、藤枝先生のも読んでいたし……そんなことで頼んだように思うんです。あのころ、僕は人文にわりと出入りしてたし、特定の人だけでも、院生がこちらの先生に師事することもわりにあつたんです。伊藤道治なんか早くから貝塚先生のところへ來てましたし、學部の院生なんかをわりに受け入れてはつたんです。

それともう一つ、それぞれ研究班ができていたんですが、新制大學ができたときに人文の研究班が大學院の授業に繰り入れられたんです。正式には、安部（健

夫)・岩村(忍)先生の元典章、安部・宮崎先生の朱批論旨、それから塚本先生の中世思想史——あのころは肇論研究から慧遠研究でしたが、そういうものが授業に入っていたんです。

高田 それはよくわかりますね。というのは、新制大学院が発足するにつけて、人文研の先生方が大学院擔當教官ということで、要は文學部の先生方と人文研の先生方が一緒に大学院をやる形になっていたのも、そういう形をとらざるを得なかったんでしょうね。

笠沙 學部生の授業もあって、學部の先生だけではとても手に負えないし、高度な研究を習得させる目的もあったんでしょうね。僕は元典章も朱批論旨も出だし、塚本班にも出させてもらっていました。それは修士のときでしたが、ドクターコースになってからは、とても忙しいから元典章も朱批論旨も断り、そのうちに思想史班と敦煌班に加わっていったんです。それが人文研に入るまでの一應の経歴ですね。

高田 今伺ったことで氣になったのは、敦煌寫本のマイクロフィルムが東洋文庫に来て……ということは我々もよく伺っており、一般的にも知られているんです。しかし、それを使って藤枝班ができたとは短絡的に考えがちなんですが、藤枝班はずいぶん後のことで、当初はとも、そのマイクロフィルムを研究するのに全国的な組織として科学研究費を申請し、東京と京都でやるという形になっていたのではないかと思われるんです。

笠沙 僕もその邊ははっきりわかりません。けども、こっちの特集號の序²を見ると、これは森鹿三となっているけども、實際は藤枝先生が書いたもので、その1ページ目の終わりから4行目に「こうした機運の起こる一つのきっかけになったのは、山本達郎・榎一雄兩東大教授がロンドン滞留中、同地にあるスタイン蒐集文獻のほぼ全部をマイクロフィルムにしてわが國にもたらしたことで」と言っている。この劃期的な大事業は、日本學術會議の東洋學連絡委員會の發案と支持の下に」とある。この間、別のことで永田(英正)君から電話があって、「藤枝先生が何かの追悼文で『このときに焼付けについて貝塚さんに非常に盡力をいただいた』というふうに書いてあるけど、ご存じですか」と。「いや、僕はペイペイのころやから、全然知らんけど」と答えたんですが、ともかくこういうものが起こったわけです。

科研費のことは鈴木俊の文章³のほうがよくわかると思います。「東洋文庫の岩

²『東方學報』京都第35冊「敦煌研究」特集號の「序」(森鹿三執筆)を指す。

³上に見える『敦煌文獻研究論文目録』(東洋文庫敦煌文獻研究連絡委員會、1959年)の「序」(鈴木俊執筆)のこと。

井大慧、田川孝三、東京大學の山本達郎、榎一雄、仁井田陞、京都大學の塚本善隆、藤枝晃らの諸氏と圖り」となってますから、後で科研費のそれができたんと違いますか。「前記の諸氏のほか、大正大學教授吉岡義豊」云々とあり、實質的にやったのは吉岡義豊のほか、小笠原（宣秀）さんや野上（俊靜）さんは実際にはやってないし、安部さんもやってないと思います。貝塚さんは名義人。入矢さんはやられた。森三樹三郎さんもここには來られなかったですね。田村先生、平中さんも來てないけども、ここにある15人が科研費のメンバーだと思います。

高田 いわゆる大型科研というもので、「総合研究」と書いてありますから、今で言えば特定研究に当たるものなのでしょうね。

笠沙 かなり額は大きかったと思います。そして實務は、東洋文庫は田川さん、人文研は藤枝さんでした。

高田 マイクロフィルムを研究することを主眼としたわけで、「研究班」ではないと思うんです。

笠沙 研究班ではなかった。

高田 いわゆる研究グループが活動をしていた、ということなのでしょうね。

笠沙 東洋文庫と人文研との関係を言う場合、岩井大慧と塚本善隆の仲が非常に緊密だったんです。僕が驚いたのは、助手になって最初に東洋文庫に行ったとき、塚本先生から岩井先生にそれが伝わっていて、着いたらすぐに「來い」というわけで、文庫長室に恐る恐る行ったことがあります。金取りは貝塚先生やねん。學術會議に出てはったから。そして實際の仕事は、岩井さんや塚本さんの音頭のもと、藤枝さんに「やれ」ということになったんだろうと思います。

高田 昔は、助教授は研究班を組織できなかった。藤枝さんは教授になるのが遅かったから、研究班を組織できなかったんだと思うんです。昭和43年1月から藤枝さんが自分の研究班を持ち、「中國古文書學の體系化」というんですが、どういわけか、これが2年なんです。

笠沙 （「Photographic Paper」を取り出し）焼付け寫眞として、まず最初は分類カード書きです。倉田先生が主になった。そうした組織化は、我々は院生——學生やから全然知らんのやけど、最初は小さい應接室でやっていたんです。そのうちにこちらの廣い會議室に移ったんです。藤枝先生の發案でしょうが、この書き入れは非常にいい案だったと思うんです。これは會議室にずっと置いてあってだれでも出して見られるわけです。東洋文庫はティン（tin）ごとに帙にしたから、曲がったりして、出すのが大變なんです。

先ほどの鈴木さんの文章の中にあるように、鈴木さんを含め「(中略) 京大人文学研究所講師倉田淳之助の15氏」で敦煌文獻研究會は組織されたい。そし

て、その目録を作るということで「既に昭和32年度に大體を完成し、次年度にそれを出版する豫定であったが」とあり、實はこれは大風呂敷なんです、「たまたま新たにジャイルズ氏の目録が刊行」されたのが57年ですね。ブリティッシュ・ミュージアムもこれができたからマイクロを撮らしてくれたんですが、その刊行により「その出版を延期することとした」わけです。「われわれの作成した目録は、ジャイルズ氏のものに比すれば、内容が更に詳しく」云々と書いてあるけれども、そこまではとてもいってない（笑）。文部省向けや。ともかく、最初のカード書き段階のときには、ここに書かれている人々もみな集まったんです。

高田 東京と京都でどういう分擔だったんですか。

笠沙 大體、佛教關係はこちら、東京は社會經濟關係でしたが、實質的にはこちらばかりが仕事をしていました。カードを作って、1部複寫して東洋文庫に送っているんです。だから、東洋文庫に今もあるはずなんです。相互に研究し合う豫定だったんですが、向こうはだれもそんなことをせえへん。池田温はこのとき東洋文庫に入っていたけどもね。



笠沙雅章教授

ペリオ本は簡単な目録があったけれども、スタイン本は全然わからなかったんですね。

矢吹慶輝なんかの古逸佛典の調査があるぐらいです。このとき、スタイン本が全部寫眞で來たというので、みな心ときめかして飛んできたわけや、何ぞ寶物があれへんかと。敦煌本やから、古典籍の寫本とか社會經濟史の資料が山ほど出てくるやろうと、はじめは皆さん期待して來はったわけや。ところが、見たらお経ばかりで、皆やめていったんです。

高田 1人去り、2人去りと。

笠沙 いっぺんにやめていった（笑）。所内では、倉田先生も題款（目録カード）を書く段階まででした。結局、佛教關係を京都はやることになったので、龍谷大學なり大谷大學の若手も參加させることになったわけです。最初のメンバーとして、龍谷大學では井ノ口泰淳、土橋秀高、それと今は奈良大學の偉いさんになっている市川（良哉）さん。ちょっと後になってから上山大峻——昭和34年ぐらいやったかな。四天王寺の古泉圓順も遅かったですね。大谷大學は滋野井（恬）君が最初で、滋賀（高義）、安藤（智信？）、そして少し遅れて藤島（建樹）といった若手が中心になりました。所内では牧田（諦亮）先生と入矢（義高）先生がずっと來られていました。

最初のカードはわかっている部分だけ。だから、不知題經はようけある。大般若だけは大体わかるんです。まず1次原稿ができて、その後、それぞれの經典を分擔し、大正藏經との同定作業を行ったんです。(カードを繰りながら)これは全部僕や。

赤尾榮慶 經典番號も入ってますね。

笠沙 もうちょっと苦勞したやつを見せようか(笑)。「卷」と書いてあるやつはあかんねん。

赤尾 斷片ですか。そういうのは苦勞しますね。

笠沙 例えばこれや。「首尾均缺」とある。最初は卷數を入れてないんや。後で調べてわかってから入れているんです。

高田 なるほどね。今ならデータベースで一發ですがね。

笠沙 それぞれお經によって分擔を決め、同定作業をやったんです。

高田 先生のご擔當は大般若だけだったんですか。

笠沙 違う違う、般若全部。大正大藏經4冊(笑)。毎週月曜日の午後は研究會です。月曜日というのは龍谷大學でも今も續けていますが、毎回4冊を持ってきて繰っていかならん。そのうち、大体この繰り返しはこの邊やろうなとわかってきたけれどもね。

落合 今でも、データベースがあっても、大般若はどの單語をとろうかと、結構時間かかりますね。うまくいかないです。

笠沙 難しいやろ。なかなか出てこない。

落合 同じ繰り返しで、頭が痛くなりますわ。

高田 小さな斷片ですとね。

笠沙 自慢話はまた後でしますが、僕に般若經典をやれというわけや。解題でも、般若經典は僕がみんなやった。維摩經はだれとか、法華はだれとか、それぞれ決めてたんです。

高田 分擔表を見てみたいですね。

笠沙 資料集を出すべしという計畫が藤枝さんの案で作られたんです。それぞれ解説の擔當者が入った分擔表をきょう持つてくるつもりやったんですが、忘れてしまいました。それにはさっき言った人々のほかに、大阪市大の西野(貞治)さんは文學作品のほうで、論文も書いている。

一方、同定作業ばかりではおもしろくないので、研究會としていろいろなものを讀みました。入矢先生が来てはるから、「夏安居」と稱して、夏休みに集中的に變文集を寫眞を見ながら讀んだりしました。先生が「これはわかりませんね」と言われたら、ほっとしました(笑)。また、85卷の古逸部の中の祈願文なんかも讀

みました。

高田 變文集は、王重民のが出てからですか。

笠沙 出てから。寫眞と合わせたりもできるようになった。實は研究發表もやっており、僕の3部作⁴もその研究會で發表しました。

高田 この60年前後は、當時「藤枝班」とは呼ばれていなかったんですね。

笠沙 正規の研究班にはなっていなかったけども、大體は藤枝さん中心やった。

高田 「藤枝班」と稱してたわけですか。

笠沙 敦煌班や。ただ、あの時期でも藤枝さんは「敦煌しかやらん」という批判を受けていた。そんな時代です。ましてや、我々若い連中は「そんなものばかりやってたらいかん」と言われました。僕は書庫の仕事が忙しいこともあって、倉田先生は出るのに反對されなかったけど、餘りいい顔はされなかった。龍大あたりから來ている人も「我々は佛教學だから、こんなことをやっていたんでは認めてもらえない」と、非常にジレンマを感じながら研究してました。その點は今とだいぶ違います。

高田 「敦煌學」というものがなかったからね。

笠沙 國際交流もなかったしね。だから、肩身が狭い感じだった。ただ、大谷文書で西嶋（定生）さんらがやりだした「西域文化研究會」、あれで敦煌・トルファン文書というのが市民權を持ちだしたんです。

高田 60年代の初めでしたか。あれだけの立派な本をどんどん出したわけだから……。

笠沙 藤枝先生は講師をやることになってて、書かなんで……。

高田 あれの一部なんですか、そもそもは。

笠沙 いや、出してないんです。

高田 出してないけど、本來の計畫としては……。

笠沙 いや、それは全然別です。ところが、自分は書かんといて、批判ばかりしてはった。西域文化研究會ということで全然別です。なぜ京都の先生方を入れなかったのか。

高田 内藤乾吉先生なんかは出てはりますね。

笠沙 那波先生も佛教美術で出てはるけど、社會經濟資料は東京へ行ってしまった。

高田 何でなんですかね。

⁴「敦煌の寺戸制度」（『東方學報』京都31、1961年）、「敦煌の寺戸について」（『史林』44-5、1961年）、「敦煌出土「社」文書の研究」（『東方學報』京都35、1964年）を指す。いずれも『中國佛社會史研究』（同朋舎、1982年）所收。

竺沙 そこらはわからん。それで敦煌班は、鈴木さんが書いているように、32年にカード書きを一應終わり、その後は、それぞれが分擔して同定を行う、同定作業を終わったものから解題を書いていく、という仕事をしたわけです。「般若波羅蜜多心經」はだいぶ後で、60年から62年ぐらいまでです。コピーしてくれるのは事務の女の子で、はじめは中島さんという子やったが、美人ばかりやったね。次は、わずかな期間やったけど、大谷さん——西本願寺の今の門跡の妹で、慶應を出ているんです。中央アジアをやりたいと言うてたらしいけど、松本信廣さんがヴェトナム史で、そっちをやらんとあかんというわけで、いやいややりましたと言うてた。その人がここでお茶くみしとる。上山大峻らが「こんなお嬢さんにお茶くんでもらうて、恐れ多い。田舎へ言ったらしかられるわ」と（笑）。

高田 伯爵家でしょう、戦争前なら。

竺沙 氣さくな子やったけどね。62年ぐらいになると、上西さんという人でしたが、スタイン本の中に、例えば般若心經が何点あるか、そのバリエーションがどうか、というようなことを解題していき、いずれはまとめて出版する目論見があったんです。それと、大正藏85巻は非常に不備で、その後たくさん出ているから、85巻の續編を出版するという計畫も持っていたんです。それから、お経だけじゃなくて、僧統文書とか社の文書とかの文書集成をやる計畫ができていたわけですが、結局、全部計畫倒れに終わりました。しかし、みんな苦勞しましたが、これをやったことは非常によかったと思います。

そんな中で、例えば上山大峻は、法相關係の曇曠、法成の注釋書を解題していく中であの論文⁵になりました。僕は歴史の者やから、解題とは直接關係なかったけれども、『沙州文録』などを讀んで、社なんかに関心を持ったんです。社は那波先生がやってましたからね。同定作業の研究會の中で自分の研究に生かしていた人が何人かいました。

僕は、60年から文獻センターの助教授になったために忙しくて敦煌班もサボりがちになりました。63年に文學部へ替わったとたん大學紛争があり、また、文學部ではそれこそ「敦煌ではあかん。宋代史をやれ」というわけや、佐伯先生あたりが。だから、敦煌研究とはだいぶ疎遠になりました。

大般若なんかはみな9世紀に決まっているんだけど、實は、この大般若の書寫が吐蕃占領期に行われたことをはじめて發見したのは僕なんです。ところが、論文にしようと思っっているうちに、「吐蕃支配期の敦煌」を藤枝さんが書いて、その中に僕の發見も入れてくれたわけや。

⁵「大蕃國大德三藏法師沙門法成の研究（上）」（『東方學報』京都第38冊、1967年）、「同（下）」（『東方學報』京都第39冊、1968年）を指す。のち『敦煌佛教の研究』（法藏館、1990年）所收。

高田 「くれた」て……。

竺沙 取られたという気もある(笑)。敦煌研究の中で僕が非常に興奮したのは、洪誓のこと、つまり僧官制度のことと、吐蕃期の寫經事業です。ただ、残念ながら僕はチベット文書を読めないわけや。そこを藤枝さんがやってくれはったんです。

それがどうしてわかったかという、巻尾に校正者の名前が出てくるんです、第1校はだれ、第2校はだれ……。みな坊さんやけど、それが吐蕃期の別の文書に出てくるわけです。大谷大學の滋賀君が金光明(經)をやっていたんですが、そこでも同じようなことが出てきて、金光明もあの時期だということがわかったんです。もちろん、無量壽宗要經はチベット文もあるし、漢文もたくさんある。そうということから、吐蕃期の寫經事業が我々の研究會でクローズアップされてきたんです。それを結集したのが藤枝先生の「吐蕃支配期の敦煌」なんです。

僕はよく自慢するんですが、世界ではじめて吐蕃期を設定したのは我々の研究會でなんです。そのきっかけになったのが、今でこそ言えるけれども、大般若の寫經事業は吐蕃期だったという僕の発見なんです。

高田 吐蕃の後期なんでしょうね。

竺沙 820年ぐらいです。きちっとはいかんが、大體そのころだと思います。これが研究會で発表した僧官制度の一覽表です(示す)。とにかく、発表させてもらえるのは非常にありがたかったですね。土橋先生は、もう亡くなられたけど、律をやっておられた。

高田 戒律ですね。そのころが先生のピーク時といえますか、班で活動された。

竺沙 敦煌研究のね。

高田 そのころ一緒に班で活躍されたのが、上山先生とか土橋先生とか……。

竺沙 それから井ノ口さんが、あのところ佛名經をやられた。あんなややこしい、大變なものを。牧田諦亮さんの偽經研究もここから始まっているんです。それらの牽引者は藤枝先生で、次々と大作を出されました。

それで、カードにはそれぞれ「書寫」という項目があって、書寫年代を記録しているんです。

高田 それはどうやって決めたんですか、紀年のあるものはいいとしても。

竺沙 そこなんや。そこで藤枝先生の同定法が始まったんです。つまり、北朝寫經は隸書體から楷書體へと移行する時期なんです。その邊は赤尾君の専門やけど、その移行期の書體の變遷で時代を決める。そのメジャーとなるものが必要だというので、『墨美』にそれぞれ書いていかはったわけです。一番最初は敦煌寫經だったと思いますが、森田子龍さんと仲がよかったので、『墨美』をフルに使いはった。

高田 「字すがた」シリーズですね。

笠沙 一番最初が「敦煌寫經の字すがた」（『墨美』97號）で、1960年に出ています。その後「北朝寫經の字すがた」が119號で、62年8月に出ています。これを書體の時代判定のメジャーにするんだということで、あれが出た後、照らし合わせながら「これは5世紀だ」「6世紀だ」というふうに決めていった。藤枝先生の得意なところで、その後、トルファン文書をやられるようになってから分類はもうちょっと詳しくなってきました。

高田 當時はまだ字の形だけで、紙質などは見ておられませんからね。

笠沙 そうです。ただ、これまで神田喜一郎ら書道史——平凡社の『書道史』が出たころやけど、南朝の法帖だけで、北朝寫經などに對する關心がなかった時期に、書體で時代判定をすることをやったわけです。

それと、吐蕃期の場合も畫期的で、これは那波先生の悪口になるけど、中・晩唐・五代というふうな時代設定でなしに、吐蕃期以後は中國外であったことがはっきりしてきだしたわけですね。我々がやりだしたころは寫眞だけで、紙などの問題までは日本にいるからできなかったんです。

高田 吐蕃期・歸義軍期というような敦煌の編年の問題ですが、あれは既に「沙州歸義軍節度使始末」にもその考えは出てますね。

笠沙 はっきりは出ていないんです。歸義軍期はあそこから始まっているが、吐蕃期がどこかはわかっていないんです。吐蕃が占領されたのは781年というのが藤枝説やったんや、文獻によって。

高田 當時はね。今は786、7年ぐらいです。

笠沙 これまでの敦煌研究は、大般若や法華經といったポピュラーな、普通のお經には全然關心がなかったから、だれも調べていない。僕は一回、藤枝先生に「東洋史の者がこんなことをやって……」とぼやいたことがあるんです。そしたら「おまえ、なに言うとりんや。世界中で般若を全部見たのはおまえだけや。プライドを持って」と言われました（笑）。だから、それは今でもこれからやるべきこととして残っていると思うんです。まあ、僕が敦煌研究にかなり集中したのは、文獻班の助手のころでしたね。

高田 それ以降は、先生ご自身もだんだん研究班に出られなくなったんですか。

笠沙 物理的にも出られなかった。東京へ行って明版の撮影をやらされたりして。

高田 そうすると、正規の藤枝班、いわゆる研究所の研究班としての藤枝班は、彙報を調べてみると昭和43年から始まるんですが、先生はその班員ではなかったわけですね。

笠沙 なかった。名前は入れてはったかもしれんけど。そのころに菊池英夫が來ているな。紛争の前やったか。だから、その7年間は僕の研究生活の中で一番

充實もしていたし、今考えると一番楽しかった時期ですね。晝間は、この研究會以外は圖書の仕事をやり、いったん銀閣寺のほうへ歸り、夜8時ぐらいからまた来て自分の勉強。目録カードなんかも2、3回は全部見てますが、それも晩の仕事。夜中の2時ぐらいに歸った。藤枝さんもそうで、あのころは夜のほうがたくさんいて、藤枝さんはあっちこっち行って一人でしゃべったりするもんやから、きらわれて……（笑）。

高田 藤枝さんの敦煌班はかなり長い期間にわたっているんですが、先生はその前半部分に参加されたわけですね。

笠沙 ……が中心です。龍大になってからも顔は出しています。

高田 メンバーもかなり出入りがあったということになりますね。

笠沙 いや、そうでもないです。大谷大學の連中は残らなかったけれども、また、土橋さんは亡くなられたけれども、井ノ口さん、上山、古泉……その邊は現在も續いているんです。

ベルリンでの調査と大般若

高田 龍大の関連で、ベルリンのトルファン文書の仕事に関係してくるんですが、先生もそれに……

笠沙 関係しています。最初は出口コレクション。敦煌班としてよそのコレクションを調査することがあったんです。

高田 いつごろからですか。最初はスタインをやっておられましたね。

笠沙 はい。その関係で京博にある守屋コレクションに行ったんですが、あれはいつやったやろ……。

赤尾 すぐ後と違いますか。たしか、あの寫經コレクションは昭和39年ぐらいに発行されていたと思います。

笠沙 37、8年かもしれませんね、調査したのは。

高田 有鄰館も……。

笠沙 あれは、班としては行っていません。大谷大學のコレクションも全部、調査しています。

高田 唐招提寺はどうなんですか。

笠沙 あれはにせものばかりで、関係ない（笑）。僕も2、3年前に見たが、ほんまに困ったもんや。長行馬（文書）が1955年に出て、維摩變が……。つまり、守屋コレクションがあって、その後に出口コレクションの調査があった。これが

大きいんです。あれも30何年かですね。大相撲をやってた……テレビで見てたんやが……

高田 大相撲は毎年あるから、それではわかりませんか(笑)。

笠沙 「高昌殘影」の基になった調査……38年ぐらいかもしれません。大阪まで行って調査したのが「高昌殘影」の最初です。それなんかも、寫眞をコピーしたもので同定作業をこの研究會でやっていたんです。そこでトルファン文書との出會いがあったわけです。

そのときに、僕に版本をやれということになったんや。出口コレクションは版本をかなりやりました。それがきっかけで僕の版本研究が始まったんです。

高田 大藏經のはなれが多いんですか。

笠沙 でもない。單行本と兩方。大藏經のはなれがわかりだしたのは最近になってからです。文獻班に來たときに、森先生に高山寺やら正倉院やら、あちこちに連れていってもらったんですが、「佛書の版本學はやれてないから、おまえ、やったらどうや」と言われたわけです。「はあ……」と生返事で聞いてはおったんやけど、まあしかし、對象が鳩摩羅什という人やしねえ(笑)。あのころの中文は、小川先生はちょっと關心を持ってはったかもしれないが、吉川さんなんて、佛教には見向きもしない時代でした。そこで福村さん(福永か?)なんかが頑張らしたんやけどね。そんなことで版本をやるときになって、「おまえ、言うたけどやってへんな」と酒の上で森先生に言われたことがありました。しかし、文獻班での中國版本學の基礎を受けたことが、僕のトルファンの版本研究や大藏經研究の手がかりになったわけです。つまり、中國の版本學では1行何字とか1面何行とかというのがものすごく大事なんです。

高田 版式の様式がね。

笠沙 ところが、そのころは全然そのことを見ないわけです。そこで見ていったら、14字と17字という違いがあることがわかり、そこから3分類を作り、出口コレクションのそれでまず發表したんです。それから發展して契丹、大藏經、高昌殘影なんかになっていったんです。だから今は、トルファンのものであっても寫本より版本のほうになってきてますね。

それで、これは「彙報」欄を見ていけばいいんですが、藤枝先生はその後、ヨーロッパへ出かけられるようになったんです。そのころはまだ東ドイツと國交がなく大變やったんですが、ともかく行って道を付けられ、一番最初は井ノ口さんが行ったのかな。古泉君はだいぶ長く行ってたけど、僕らは20日ぐらいだけです。ただ、ティロ(Thomas Thilo)の第1目録はもうできた後で、第2目録を作るべしというときやったと思います。井ノ口さんや古泉さんらが行っていて「般

若はみな残したるさかいに」と言われてたわけや（笑）。

高田 先生がベルリンに行かれたのは？

笹沙 僕はだいぶ遅くて、76年やったやろか。まあ、これはベルリンでの自慢話になるんやけども、僕が繰ってるのをみんな見てるわけや。

高田 向こうの人がですか。

笹沙 うん、シュミット（G. Schmitt）なんかの連中。そしたら、僕が大般若をぱっと見つけたんや。みんな、目を丸くしてました。そのときはそれで終わったんやけども、4、5年たって、ミュンヘンの東洋學研究所所長のシュミット・グリンツァー（Helwig Schmidt-Glintzer）が日本に来て、京都にも来たんです。僕とはマニ教のを彼が出すという話だけやったんですが、そのときにヴァレリー・ハンセン（Valerie Hansen）がいて、僕の武勇傳を言うてるわけや。マジックをやったということが西のほうにも伝わってたらしい（笑）。ヴァレリーが「先生、あのときどうしてわかったんだ」と聞くから「勘や」と言うたんです。そしたら喜んで、僕を紹介する文章の中に「kan」と書いてんねん（笑）。いかにも東洋的やと。

その後も次々だれかが行っており、現在、ベルリンのものは龍大に寫眞が来ていて、そこでやっています。百濟君が今は責任者で、だいぶせかしているらしいが、なかなか全部はわからへん。

高田 豫告は出ているんですが、西脇（常記）さんのやつの中にラシュマン（Simone-Christiane Raschmann）が去年中にも出るようなことを書いてましたが……。

笹沙 『高昌殘影』も今年中には出るやろうと思う。3校までいってるんやけどなあ。

高田 去年もそう言ってましたね（笑）。

笹沙 去年中に出るはずやったんや⁶。

落合 寫眞自體は昭和54、5年に私、最初に見ました。

笹沙 まだ残っているんやて、法藏館に。何とか賣りたいんや。ただ、今度作るやつは、上に圖版、下に釋文という形で、ハンディーなものにすることになっている。3校ぐらいまでいっているんですけどね。『高昌殘影』は1978年です。人文研にも入ってないんやてな。

高田 ないんです。

笹沙 買った？

高田 いえ、買えないから買わないんです。古本でときどき出ますが、値段が

⁶藤枝晃編著『トルファン出土佛典の研究 高昌殘影釋録』として、2005年に法藏館より刊行された。

高い。僕は武内（紹人）君のお父さんに見せてもらいました。

竺沙 山田信夫さんも持ってなくて、「何とかならんか」と言うてました。「高い値で賣ったろうか」と言うたんやけど（笑）。

高田 何とかありませんかねえ。

竺沙 それはさておき、藤枝先生は70年代になってから毎年のように外國へでかけはりました。ロンドンでは、これが厚かましい調査の仕方、紙の質を見るからと窓にぺたっと引っ付けて寫眞を撮られたり……。よく認めてくれたと思います（笑）。それから紙の質ということを先生は問題にしました。

出口コレクションは、點數はそんなに多くないけど、本當にバラエティーに富んでいて、見本になるものですね。そこでA、A' 云々という問題が……。

敦煌班の動向ですが、僕が餘り出られなくなったころから、ペリオ本が直接向こうから手に入るようになったんです。それまでペリオ本は、重松俊章が撮ってきた寫眞なんかも貴重なものだったけど、じかに撮影できるようになって、かなり見やすくなった。北京本も見られるようになって、そこから藤枝先生の關心が北朝寫經——北朝の注釋書に移っていったんです。そのころの研究會は荒牧典俊君も出ていたと思いますが、古泉さんと共同で勝鬘經義疏をやって、聖徳太子偽作説・種本説というのが出てきたんです。あれが昭和40年代前半におけるあの先生の中心の研究テーマだったと思います。

高田 正式の「藤枝班」は昭和43年にできてまして、「中國古文書學の體形化」という題目ですが、どういうわけか、それは2年間だったですね。

竺沙 そのときは漢簡と兩方やっぺいこうということやったんやろうな。曜日を変えてはったと思います。……森先生がやめはったからと違う？

辻 「所報人文」にこんな記事⁷が載ってますね（示す）。

竺沙 擔當は源、山田、上山となってるな。で、古泉、荒牧と。荒牧君の六朝研究もこの邊から始まったと思います。

高田 荒牧さんは助手のころですね。

竺沙 助手。「中國古文書學の體形化」というのが後で「敦煌寫本の研究」になったんですね。

高田 そうです。昭和45年に変わったようです。

竺沙 紛争の最中や。

高田 それが定年退官されるまで續く。

竺沙 定年になって、それが龍谷大學の「西域文化研究會」に移ったんですね、

⁷『所報人文』第1號（1970年）、16-17頁にある「敦煌寫本の研究」班に関する記事（藤枝晃執筆）を指す。

井ノ口さんが責任者で。井ノ口さんの後は上山大峻になり、今は百濟（康義）になって續いているわけです。

文學部時代と敦煌學の將來

高田 先生は文學部に移られて、班のほうも忙しくて出にくくなったというお話でしたが、先生ご自身、文學部で敦煌學にかかわる講義なり演習なりをされたのは餘り多くないですね。

笠沙 非常に少ないです。やはり、そういう偏ったのはよろしくないといった、暗黙の雰囲気は文學部にあったこともあります。演習で敦煌文書を使ったのは2年ほどやったかな。

高田 最後ぐらいですね。「遼眞讚」を読まれた。

笠沙 佐伯先生がやめはった後です。はっきりいえば、おこられるからや（笑）。文學部へ變わって、紛争があったこともあるけど、宋代の佛教社會史研究の主な論文はその時期に作ったんです。だから、敦煌とは縁が切れていて、「講座敦煌」も引き受けるのをだいぶ躊躇していたんやけど、あそこで「寺院文書」を書いたのが復活のきっかけでした。その前に吐蕃期の小さなものは書いてますが、餘り主にはやりませんでした。まあ、文學部にいたのでは物理的にできないし、教えるにしても、やはり學生の關心を引かんわけや。西域文化で、例のトルファン均田制云々というような土地文書なら關心も持つやろうが、それ以外で關心を持たせるのは無理やし……。

高田 でも、最後の2年ほどの敦煌寫本を扱った授業では……。

笠沙 井上徳子、彼女が2回生のときに敦煌文書の講義をしたことがあるんやけど、えらい喜びよったそうです。3回生用なんですが、もぐりで來てね。

高田 辻さんも受けているでしょう。

辻 そうそう。

笠沙 むしろ、文學部での講義では中國文獻學やったな。あれは今でも「あの講義を受けてよかった」と言うてくれる。だから、敦煌學はおさらばしたつもりやったが、何かしらん、腐れ縁もあって、今もこういうことになっているんです。

高田 そうすると、敦煌學の學生を出すまでには至らなかった？

笠沙 もちろん（笑）。そんな學生はおらん。やはり、歴史の場合、敦煌は邊境としか見られないんですね。都を中心にした王朝史ではない。我々の研究會のときには、佛教の金岡らが「敦煌は邊境や」とか言うていたが、「そうやない。邊境どころか、長崎みたいなところやったんや」と。

それと、例えばどうも今の漢簡研究はおかしい。この間、はじめて論文に書いて痛切に感じたんやけど、漢簡が文章として讀めていない。「若い連中はまず漢簡に飛びついていきよるが、それはあかんので、やはりオーソドックスな『漢書』なり『史記』なりをベースにして、それから漢簡に入らなあかん。危機感を持つ」と富谷（至）にも言ったんです。それは敦煌文書についても言える。

高田 そうでしょうね。日本の學界は敦煌學が成立したきっかけを作ったわけですが、最近の2、30年ぐらいの推移を見ると、敦煌學は日本では絶學に近くなってきたかなという感想を持たないわけでもないですね。先生がおっしゃるように、現場で自覺的にやらないと、その學問はしんどい面がありますね。物理的にできなかったと言われたけれども、今はむしろ、ある意味で敦煌寫本に接觸できる條件は整っているんじゃないですか。

笠沙 結局、藤枝さんのいわれた「つまみ食い、寶物探し」しかできない。我々が最初やった、例えばスタイン本を全部見てしまおう、その中から何かを引き出していこうというやり方、これは東方文化研究所時代からの京都學派の一つの傳統だと思います。ある時代の事柄についてはまず全部の資料を集めて、それをこなしていく。敦煌文獻についても、全體をとらえて何かを引き出していく態度をとろうとしても、あまり實りがない。特に、大般若とかの古逸でない佛典は敦煌文書の大部分を占めている。それがおもしろくないから全然見ようとしなない。しかし、日本には少しあるけど、これだけ佛典の寫本が残っているのは敦煌なんです。藤枝先生が「寫本學をやらんといかん」と言われたが、それは確かに言えるだろう。しかし、そこまでいかななくても、例えば唐代までの寫經がどういうものであったか、それも古逸佛典や偽經でなくて、普通の佛典全部あわせてその流れをつかむ——これは佛教文獻學の大きな仕事やと思うんです。だから、あの時期にやった解題をもっと發展させていかなければいけない。今やられている敦煌佛典の研究は、それこそつまみ食いで、自分の關心のあるものだけちょこっとやる。そうじゃなくて、兜木（正亨）さんのように法華經全體をやる、あれをもっと廣げて大藏經全體についてやっていくべきやと思うんです。中國の方廣錫のやり方もあかんなあ。あの人も寫本が全然わかってない。中國というのは、移録したらもうええというところがあるね。

高田 そういう側面はあるでしょうね。寫本學確立の必要性はあると思うんですが、寫本學は「敦煌學」でしかあり得ないというところが問題なんでしょうね。

笠沙 今はね。ただ、簡牘から敦煌文書へというつながりが、もう一つ必要だと思うんです。この間、はじめて漢簡の論文を書いたときにそれを痛切に感じました。これまで僕は、敦煌文書で文書の形式なんかを見てきたけど、そこから

見たら共通するものを持っているわけです。漢簡だけやっている人はそこがわからない。だから、寫本學なり古文書學なりという場合に、甲骨まではさかのぼらないけれども、せめて簡牘から敦煌・トルファン文書へと。まあ、それに關心を持っている人は何人かいて、冨谷も言うていたし、靱山（明）もそういう研究姿勢ですね。これからはそういう方向の研究が生まれてくるだろうと思います。

高田 中國のその種の現物資料というか、簡牘でもそうだし、寫本でもそうなんですが、ヨーロッパの寫本學とは少し違うと思うんです。ヨーロッパの寫本はほとんどが「本」ですが、中國の出土資料の場合は「文書」ですよ。

笠沙 寫本學と古文書學は共通していると思うんです。ところが中國の人は、どうしてもそういうところへ入っていかん。紙の質とか筆跡とかというところに入らずに、移録したらもう藏外文獻で終わり（笑）。だから、僕ら……というと僭越やけど、古文書學を寫本に適用していく、また、漢簡でも、寫本を含めて、古文書學的手法が必要だと思うんですね、物を扱う場合には。

辻 圖書館なんかで調べるときに、その条件が整っているかとなると、なかなか難しい面がありますね。実際に物を出していただいても、紙の質なんか調べるのに自分で道具を持ち込んでも、「いためるんじゃないか」と警戒されますし……。

笠沙 そこは難しい。所藏機關が優先されるので、お互いに共同で同じような方法論を用いてやっていかざるを得ないんじゃないかな。ドイツでも、今でこそかなりルーズになったけど、中國でも所藏者に優先権があって、我々はある意味でその研究成果を利用させてもらう形になっていく。そこで國際交流が必要になってくる。つまり、自分で中國へ行って物を取ってきて研究するというようなやり方は、もう戦後は通用しないと思います。

高田 共同研究をうまく組織していくということでしょうね。

笠沙 確かに、我々が向こうで勝手に見ることはいいかもしれないが、それぞれの機關がお互いに研究を進めていく……となると日本には何もないということになるかもしれないね。

高田 ただ、古文書學的研究は現物に相對さないといけないかというのと、必ずしもそうでない部分もありますね。近年は非常にいい畫像データも出回ってますから、そういうものでやっていけるということはあると思うんです。

笠沙 パリの目録でも、紙の厚さなんか、藤枝さんが言ってからちゃんと書いてあるし、細かいデータをカタログに付けるようになったことも大きいね。

高田 「敦煌學國際連絡委員會」も成立しておりますので、そんな枠組みの中で共同研究を進めていければいいと思います。

笠沙 ただね、元に戻るかもしれないけど、やっぱり「敦煌なんかやっているや

つは……」と言われるのは問題やね（笑）。もう一流になっている人はいいけど、若い連中がそれについてくるか……。

辻 厳しいですね。「どこをやっているんですか」と聞かれて「敦煌です」と答えると、ちょっと困られることがまだある。「唐代史です」とか「宋代史です」とかだと、何となくわかっていただけのんですけど。

笠沙 東洋史の場合、正史を中心にしなければならぬというのが伝統やからね。佛教史なんかあかんとなるんだが、藤枝先生は「むしろ正史にないからやれ」と言われた。そういう見方もある。だから敦煌文書というものも、文書も寫本も含めて、それをイコール中國のものとしてしまっても具合悪いかもしれないが、一般性のあるものに高めていくようなことが研究上、必要かもしれないですね。

それと、我々のころとかなり違うのは、中國でも敦煌研究者が増えてきた。これは大きいと思うんです。

高田 非常に多いですからね、今の中國でも。

笠沙 そういう人々と切磋琢磨できる點は、我々の時代とは違います。今、フランスなんかはどうですか。

高田 少数の人間がやっていますが、敦煌學が獨立した形であるかというのと、やはりそうではないでしょうね。イギリスは絶滅しました。ドイツなんかはトルファンしかやらないし、中國學としてのトルファン學はもはや存在しません。

笠沙 ティロだけやろう。

高田 トルファン學には2種類あるんです。胡語を扱うのと、漢文の……。

笠沙 文書や。

高田 違う2種類のトルファン學やと、僕は言っているんです。

笠沙 だれかが「敦煌學なんてないんじゃ」と言うてたけど。

高田 それは前から議論になってましたね。

笠沙 體系はないけどね。ただ、人文科學なんて趣味の學なんで、自分の好きなことを深くやったらええと思うんです。大學で教えるとなると、そうはいかんけど。

高田 中國では、敦煌學は正規の學科みたいな形で専攻ができていて、蘭州大學のように敦煌學の博士號を出しますから、日本とはずいぶん違うと思うんです。

笠沙 東洋文庫もあかんねん。鈴木さんが書いているように、部門別の目録を出しているし、池田君なんかは研究會も少しはやっているらしいけど、餘り活發ではないようやね。

高田 月1回ぐらいでしたが、ここ何か月かは案内も來ませんね。

笠沙 やってないんと違うか。

高田 世話人は……

高田 妹尾（達彦）さんがやっています。

笠沙 「講座敦煌」を見ている、我々は全部見たからかもしれんけど、どうも素人的な人がやっている感じを受けますね。

高田 今、東洋文庫の部屋が土・日は使えないので……。

笠沙 組織變えしてしまったしね。

高田 この間たまたま寄ったら池田先生は来ておられなかったけど、むしろ美術史の人が多いですね。敦煌研究院が常に東京に人間を送ってますから、そういう人が主力になっている部分があります。育成の方法を具体的に考えないといけないとは思っているんですがね。

笠沙 やはり、讀んだり見たりすることが定期的に行われる必要があると思います。そのためには、據點を作った方がいいですよ、日本でも。高田さんが人文研におるんやから、敦煌學の日本における中心になってほしいですね。

高田 やりますか（笑）。

きょうはいろいろ勉強させていただきまして、どうもありがとうございました。